

# ドイツからの声

## ―ベアーテ・ウエーバーによるインタビュー―

現在の文化的状況については、きつと芸術家の数ほど様々な相反する考え方があろうでしょう。したがって、インタビューを通して客観的なイメージを伝えるのは、非常に難しいことです。インタビューアの姿勢や精神状態自体、常に一定というわけではなく、その人がよい一日を送って成果があったのか、または、統一ドイツや、東と西の間に横たわる根の深い相違などの、不愉快な現実にもまたもや直面したかによって、変わってきます。失業率の高いことや、東と西で賃金格差があるという不公平（たとえば、東では、賃金に勤続年数が加算されないの、何年もよい仕事をしたことが証明済みであっても、全くの初心者であるかのような扱いになる）について耳にしたり、あるいはまた、東の人たちの尊厳が、絶えず傷つけられているのを見たりした場合がそれです。そんな一日を過ごした後では、意気消沈し悲観的になってしまいます。逆に例えば私は、休暇中や週末に、旧DDRの村々や小都市をまわり、沢山のものが変わったのに驚かされました。家々は修復され、無数のスナックスタン

ドと並んで、素敵なカフェやレストランがどんどんでき、どこかへ出かけたなり部屋を借りたりするのが、とても簡単になりました。外観だけからでもはつきり、活気を感じることが出来ます。そんな日には上機嫌で樂觀的な気分になります。今日私は、そんな嬉しい一日を過ごしました。先週末、ラジオで、「アンテナ・ブランデンブルク」という、最近できたとても良質で人気のある放送局が、ラインスベルク音楽アカデミーについて伝えているのを聞きました。それで私は、車でベルリンから北へ一時間半ばかりの、このラインスベルクへ出かけて、自分で、新しくできたこの音楽アカデミーを写真におさめ、この発起人であり芸術監督でもあるジークフリート・マトゥス教授と、このアカデミーのプロジェクトについて話をしようと思心したのでした。

宮殿と絵のような湖があつて、ボート遊びも楽しめるこのラインスベルクは、辺境の魅力的な風景（マルク・ブランデンブルク）のただなかに位置しています。すでにフォンターネが、『ブランデンブルク紀行』の中でこの

地について伝えていきますし、クルト・トゥホルスキーの『ラインスベルク』という恋物語を彷彿とさせるものも、ここには沢山あります。プロイセンの王フリードリヒ二世は、二十二才の皇太子だった時代に、父王からこの宮殿を与えられました。ここで彼は、グラウン兄弟やブレングと音楽の演奏を楽しみ、ヴォルテールと哲学を論じ、クノーベルスドルフ、グリューネヴァルト、レクラムといった芸術家を集めて、宮殿と庭園を、ほとんど完全に美しさに作り上げました。

DDRの時代から今年初めまで、この宮殿は保健機関の所有になっていて、糖尿病患者の療養所として使われました。特に週末ともなると、庭園やカフェは、休暇をとって遊びに来る人や週末旅行者で賑わいました。一階の一部は、芸術作品の展示用にとっておかれていました。現在は、庭園のあちらこちらで、上演リハーサル中の若いオペラ歌手たちを見かけます。いわば、戸外のオペラ・ライヴといったところです。世界各地から集まってきたこの若いアーティストたちは、設立が進行中のラインスベルク音楽アカデミーの、最初のオペラ工房に参加しているのです。晩方には、このうちの三人の歌手が、ソロプログラムでお目見えました。こうして、何週間もかけて準備した成果は、ジークフリート・マトゥスの『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』と、W・A・モーツァルトの『恋の女庭師』という二つのオペラの上演で

示されます。リハーサルと並んで、著名な音楽家、研究者、評論家の講演を聞くこともできます。

森鷗外記念館総務理事  
ベアーテ・ウエーバー

Prof.  
ジークフリート・マトゥス  
作曲家・音楽研究者

マトゥス教授、ラインスベルクに音楽アカデミーを設立するという構想が生まれたのは、約一年前ですが、その経緯をご説明下さい。

この構想はずっと前に出てきていましたが、今になってやっと実現可能になりました。私はこの土地と、個人的に深いつながりがあります。この高等学校へ通い、ここで最初の作品を作曲し、この名誉市民になっています。長い間私は、このまたとない可能性があまり活用されず、建物が医療施設の手で、本来の目的からは離れた使い方をされているのを、残念に思っていました。もっとも、ここで療養する人には快適だったでしょうが。

今年の四月、ついにこのラインスベルク宮殿が保健機関の手から「ポツダム・サンサーシ宮殿・庭園財団」の手に移されました。いわゆる廷臣宿舎と呼ばれた、建物の側翼部分は、六月までに、ラインスベルクのある会社で修復を行ない、以来ここには、設立が進行中のラインスベルク音楽アカデミーが入っています。ここには、素晴らしい風景に囲まれて、十二のリハーサル室・セミナー室があり（天気によれば、もちろんリハーサルは外で行なう）ゲスト用の部屋も八十四名分用意してあります。

— この施設の経営者はどなたですか。

経営者は今のところまだ、ラインスベルク芸術文化協会ですが、協会が長期にわたってこういう企画の費用を調達することはできませんから、ブランデンブルク州に経営を任せようと画策しています。それが有望だというサインも、もうありました。現在の室内オペラ工房の後援を、ブランデンブルク州知事の、Dr.マンフレート・シュトルペ氏が引き受けてくれたのです。もとDDRだった地域でもどこでも同じですが、まだ資金が足りません。ピアノは借りものです。しかし、新規購入の楽器の発注は、済んでいます。まあ何と言っても、数ヶ月前にできただけなのので。

— 芸術事務局「ラインスベルク宮殿室内オペラ」はどんな役割を果たすのですか。

事務局のメンバーには、非常に著名な人がいます。例えば、クルト・マズア、ハリー・クプファー、アンネローゼ・シュミット、ロルフ・シュトックハウゼン、ゲッツ・フリードリヒ、ギュンター・ガウス等です。事務局のメンバーは、初期の段階から同じ理念を抱き、コンセプトの内容に高い関心を示してくれました。単に紙の上に著名人が名を連ねているというだけでなく、これらメンバーの方は、いつでも講演やレッスンという形で、直接協力する態勢にあります。例えば、近いうちに、ベルリン・ドイツ・オペラのゲッツ・フリードリヒが講演をすることになっていきます。マズアさんは、仕事が多過ぎて、今年は二つの作品の最初の上演にみえるだけですが、来年は、長く滞在をさせていただいて、それに応じた長期計画を予定しています。若いアーティストたちが、このように傑出した人たちの経験を学ぶことができるのは、喜ばしいことです。

— この音楽アカデミーないしは現在行われている最初のオペラ工房で、特筆すべきことはありますか。

室内オペラの工房は、わが音楽アカデミーの試験的プロジェクトで、似たものは今までどこにもありませんでした。この構想は、若いオペラ歌手を、あらゆる面から教育すること、将来の仕事のために必要不可欠な、基本的な経験をさせることについて、今日まだいろいろ問題が残っているという考えから生まれました。大学を卒業してから職業につくまでの移行過程が、オペラ歌手の場合いつも急過ぎるのです。当然、能力以上のことを要求されるとか、早くに挫折してしまふ恐れが出てきます。こうした若いオペラ歌手たちに必要なのは、時間や、成

功をおさめなければならぬというプレッシャーに束縛されない場所で、経験豊かな指導者のもと、ゆったりと、教育的な方向で行われるリハーサルの雰囲気の中で、オペラの解釈に取組むことです。今年のオペラ工房の作業を締めくくるのは、『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』と『恋の女庭師』という二つのオペラの上演です。現在この二つの演目をもって一九九四年に日本で客演するための交渉をしており、これは実現が有望です。私たちの最初の工房には、イギリス、オーストリア、ブラジル、アメリカ、スウェーデン、ポーランド

としてもちろんドイツからの、若いアーティストたちが参加しています。この工房に参加するためのコンクールを、来年は、日本や海外（アメリカ）にも拡げて行きたいと考えています。あなたがこの件をお伝え下さって、来年、日本の若いアーティストたちをここに迎えることができれば、大変ありがたいのですが。

— 選考の基準となるのはなんですか。

コンクール参加者は公募します。コンクールでは、現代のオペラと古典的オペラの二つを演じてもらいます。場合によっては、



リハーサルに立ちあうマトウス教授



ラインスベルク宮殿



宮殿つき劇場の跡

審査員を一、二名日本に派遣します。  
音楽アカデミーのある廷臣宿舎だった建物の後ろに、  
廃虚になっているところがありますが、あれは昔は  
劇場だったのでありませんか。

あれは昔、宮殿つき劇場でした。野外でのリハーサル  
は天候に左右されるので、といってもそれだけの理由で  
はありませんが、あの廃虚を再建したいと考えています。  
第一段階はもう始まっていますので、宮殿つき劇場が早  
く再オープンし、リハーサルだけでなく劇場として、毎  
日プログラムを変えて使えればよいと思っています。『恋  
の女庭師』を最初の上演演目にしたのは、理由あつて  
のことで、このオペラが忘れられた廃虚のようなもので  
あつた時期に、ゼンパー・オペラのアンサンブルが上演  
して、再び今日のような脚光を浴びるようになったとい  
う経緯があるのです。

— ますます意欲的な活動をなさって、あなたのプロジ  
エクトが、成功をおさめられることをお祈りいたし  
ます。ありがとうございます。

(一九九一年七月二十七日)

Dr. ジークマール・ナーザー

ベルリン国立博物館  
東アジアコレクション館長

— 昨年夏の会報で、プロイセン文化財団の博物館とベ  
ルリン国立博物館の「再統合」が計画されているこ  
とを伝えました。現在までに、具体的にはどんな措  
置に着手し、どんなことを計画中ですか。

- ベルリンの分割、二つに分かれて存在している博物館  
は約十四あり、こうした博物館をまとめるために新しい  
コンセプトが決められました。ここで重要なのは、次の  
三点です。
- ① 博物館の島は考古学の本拠地とする。(旧博物館・新  
博物館・ペルガモン博物館)
  - ② ボーデ博物館とケンパープラッツにはヨーロッパの  
美術が集まる。(ナシヨナル・ギャラリーはもともと  
ある場所に残る。)
  - ③ ダーレムにはヨーロッパ外の美術と世界中の文化を  
展示する。

— 日本人は、ベルリンでかならずしも東アジアの芸術  
を見たいとは思わないですから、考古学やヨーロッパ

パの美術といった、日本人観光客にとっての一番の  
魅力が、市の中心に集まり、市内を散歩しながら、  
または市内観光で訪れるのに便利なのは嬉しいこと  
ですね。

もちろんこのように大がかりな組み替えには、どれか  
を優先して、自由になる予算を有効に使えるようにする  
必要があります。ベルリンの博物館の統合を目に見える  
形にする為には、もちろんまず、市の中心地に着目し、  
博物館の島の再建、特に現在のエジプト博物館のための  
新博物館の再建、ケンパープラッツに、統合される鋼版  
画収蔵室のための建物の新築(これは、統合が完了した  
という最初の象徴として、一九九二年七月に完成予定)  
が計画され、そしてさらに一九九三年には、絵画館の建  
物が完成する予定です。こうなると、ダーレムの各博物  
館に使える予算は、もうほとんど残っていないことにな  
ります。ソニーから、東アジア博物館を新築しようとい  
う申し出がありました。プロイセン文化財団は、財団  
が事後負担を持つことになるので、この申し出を断わ  
ってしまいました。遠い将来に、ダーレムには、博物館  
新築が計画されています。つまり、ダーレムには、巨大な  
博物館の建物ができ、そこには、「世界の文化」が一つ屋  
根の下に集まるのです。